第４回全学教育（ＦＤ）研修会「授業改善計画の作成について」

2005 年 5 月 26 日

開会にあたって（司会：町田欣弥経済学部教授）

それではおまたせいたしました、時間になっておりますので始めたいと思います。ただいま学長より会議のため遅れる旨のご連絡をいただきました。本日は第４回の全学教育研修会ということで、最初に学長のごあいさつを予定しておりましたが、成田副学長から代行してごあいさつをいただけるそうです。それでは早速始めたいと思います。

本日は第４回の全学教育研修会ということで､既にシリーズになっておりますテーマ｢授業改善計画」で、今回は特に１年次演習、および導入教育を中心にお話を進めていきたいと思います。それでは表紙の式次第に従いまして、最初に先ほど申し上げましたように、成田副学長より開会のごあいさつをちょうだいいたします。よろしくお願いいたします。

副学長挨拶（成田憲彦副学長）

先生方、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。今、司会のほうからご紹介がございましたが、本来は学長がごあいさつされる予定でございましたが、実は学長と吉田副学長はただいま急遽開催された理事会に出席されておられます。私も実は今まで法人の評議委員会のほうに出ておりまして、学長からこちらのＦＤ研修会で代わりにあいさつをするようにということを急遽言われまして、参ったという次第でございます。

経緯は別にいたしまして、本日は第４回の全学のＦＤ研修会でございますが、今更申し上げるまでもなく、大学改革においてＦＤの重要さというのは先生方もよくご承知のとおりでございます。本年度は１年次演習についてということでございまして、私も現在法学部の１年生の基礎演習を担当させていただいております。正直申し上げまして、法学部では１年次演習を先生方が協力して全員で手分けして持つということになっておりますが、あまり先生方には人気科目ではないようですが、私は実は大変張り切って、非常にエンジョイしながらやらせていただいております。まだ白紙状態の１年生といろいろなコミュニケーションをしながら、ある意味で担当している科目の中では一番自分の人格というものを出しながら、あるいは自分の人格が試されながら、学生と触れ合いながら教育をするということを非常にうきうきする気持ちでやっております。

各学部の状況はどうなのか、また、どのように１年次演習を改善していけばよいのかということは大変大きな課題でございます。ＦＤ研修会は毎年、大変重要なテーマを扱われているわけですが、本年度もこの重要なテーマでぜひ活性化したＦＤ研修会にしていただきたいと思います。私が長々と申し上げるよりも、早速始めていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（町田）

どうもありがとうございました。突然のご指名になりまして、成田副学長、どうもありがとうございました。

突然のことが起きまして、わたしもちょっと慌てていまして、ごあいさつを失念しました。本日、進行を務めさせていただきます、経済学部の町田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速本題に入ってまいりたいと思います。本日は、教務部長が太田先生に替わられて第１回目のＦＤということになりますので、これまでと若干趣向が違うかもしれませんが、ぜひ皆さん積極的にご参加いただきたいと思います。それではまず最初に、太田教務部長より本会につきましてのご説明をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

教務部長からの趣旨説明（太田隆士教務部長）

教務部長の太田です。恐縮ですが、着席して話をさせていただきます。今年度も授業改善計画というテーマでＦＤを行います。昨年度は講義科目、外国語科目、体育科目で実施いたしました。そこで、今年度はまだ手つかずの演習科目についてＦＤを行おうということにいたしました。また昨年度、体育とドイツ語のほうからグループとして組織的に取り組んでいるという試みが紹介されました。そこで、演習に関しまして、各学部とも１年次演習に学部を挙げて取り組んでいらっしゃるということですので、今年度は１年次演習の担当の方にご自分の演習の改善計画と、それに組織的な取り組みを含めてご報告していただくということにいたしました。

１年次演習が直面しております導入教育という問題は、めまぐるしく学生が変化しているという状況にありまして、担当者だけにとどまる問題ではなくて、現在すべての科目についてすべての教員が共有しなければいけない問題であると認識しております。そこで今回は、各学部の教務委員長に１年次演習の取りまとめをなさっている方をご紹介していただいて、報告していただくことになりました。それから、１年次演習につきましてさまざまなデータが用意されてございますが、これは授業評価実施委員の青山委員に大変なご尽力をいただきました。

では、まず資料を開いていただきまして、簡単に「１年次演習および導入教育に関連して」というテーマでお話しさせていただきます。まず、『ＩＤＥ　現代の高等教育』という機関誌がございますが、そこでかつて１年次教育というテーマで特集が組まれたことがございます。その大事だと思われるところを引用しておきましたので、ちょっと読ませていただきます。「入学してくる学生の変容が大学を揺るがしています。入学者の学力や意欲、大学生活に適応する力の不足が目立ってきました。全国600を超える大学でオリエンテーション・セミナー、体験学習、リメディアル教育、学部共通教育、全学共通教育など、さまざまな形で早期の適用が試みられています」。このように大学４年間の最初の１年間の教

育と指導が極めて重要になってきているという認識から、あえて特集を組んだというように紹介されております。

また、別の論文のおきましては、最近注目されております金沢工業大学の先生から、「入学生の学力、および意欲の多様化の問題は大学にとって避けることのできないものと考えられる。大学は単に入学時点の問題という見方を変えて、教育システム全体を見直していくことが必要である」というように、やはり初年時教育が極めて重要であるという指摘がなされております。

また、2002 年度に私大協が主催いたしました、「アメリカの１年次教育の現状と背景」という講演会におきましては、いち早く大学への全入、ユニバーサル・アクセスが現実となったアメリカの例が紹介されております。First-year Seminar とか First-year Experience という概念が非常に重要なものとして取り上げられています。そこでは大学は入学者を確保し、学生数を４年間維持する必要がある、リテンション率を上げる必要があるということが強調されております。大学のシステムが異なりますが、日本におきましても、後で述べますが、退学・除籍という問題が大きくなっている現在、リテンション率をいかに維持していくかということが緊急の課題になっているというように認識しております。

もう少し視野を広げて大学をめぐる状況をざっと見ておきたいと思います。３をご覧ください。今年度、耳が痛いのですが、定員割れを起こした私立大学は 29%に上っています。それから全入となるといわれていた 2009 年が、現実には前倒しになって 2007 年度になるだろうといわれています。本学の過去の受験者数の推移をちょっと調べてみましたところ、1995 年から 2005 年にかけてはかようなほど減少しております。

それともう一つは、（４）のところに書いておきましたように、学生の受け入れに対しても変化が生じておりまして、かつては 1.3 倍とってもかまわないという状況でしたが、それがもう 1.0、入学定員に限りなく近い入学者数をとるという方向になってきております。そうしますと、ますます退学者・除籍者というのが大きな問題として一層クローズ・アップされてくるわけです。ところが、そこに書いておきましたように、かつては 100 人台であったものが 200 人台になって、最後は 2003 年度の誤りですけれども、どうもまた一つ上の数値に行くのではないかという恐れさえ感じられる状況になっております。

それからもう一つ、大きな問題といたしまして、2006 年問題というのがございます。いわゆる新課程で勉強してきた学生が大学に入ってくる年ということです。これにつきましては、2003 年度の私大協の研修会で高校の先生をお招きして行われたパネルディスカッションを紹介しておきます。高校にとっては 2003 年問題であったわけですが、社会、数学、英語の先生がそれぞれ講演なさり、数学の先生からは「従来の生徒とは全く違う」という発言もございました。

このようなさまざまな問題を抱えている大学ですが、こうした問題に的確にいち早く答えていかないと、大学として非常に危ない時代に入っているのです。（７）の最後のところ

に、これは皆さんもごらんになったことがあると思いますけれども、「10 年後への戦略」という、高等教育研究フォーラムでの講演の資料を載せておきました。そこでは現在 700 ある大学が将来的には 400 にまで収れんしていくだろうというような報告がされております。つけ加えておきますと、講演者の方が強調なさったのは帰趨がほぼ決まるのは 2010 年ということでありました。

３ページへまいりまして、このような状況の中で、大学評価が自己点検評価から外部評価へ移り、本学もあと６年以内には外部評価を受けなければならない状況にあるわけです。それで、例えば大学基準協会で大学認証評価を受ける場合にどのようなことがあるのかということなのですが、大学基準協会の点検項目も年々変わってきておりまして、昨年度から平成 17 年度にかけまして幾つか大きな変更がございました。

その中で三つほど取り上げておきました。例えば「カリキュラムにおける高・大の接続」という項目では、かつてはＢ群に「学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行できるような教育指導上の配慮の適切性」という位置づけだったのですが、それが今年度からはＡ群にいわば格上げされまして、さらに「必要な導入教育の実施状況」というように変わってきております。まさに今日のテーマはここになるわけです。それからシラバスにいたしましても、「適切性」から「活用状況」。それから、授業評価におきましてＢ群の「導入状況」からＡ群の「活用状況」というように、どんどんいわばハードルが高くなってきているということであります。

他大学の例としまして、最近新書で出ました『東大教授の通信簿』の中から気になるところ、参考になるところを書き出しておきました。どの大学でも授業評価導入に際していろいろ議論があるのですが、東大におきましては「学生による授業評価は実は教員と学生の信頼関係を創る良い手段だったことが明白になった」という位置づけがなされております。教育は熱意だと、いわば当たり前といえば当たり前のことですが、このようなことも再確認されています。それで、４ページの上の方に「教官の熱意と総合評価」という表と「授業の難易度と総合評価」集計表を紹介しておきました。残念ながら本学の授業評価はまだここまで達しておりませんが、近い将来には本学におきましてもこのような分析を、授業評価を用いまして行っていきたいと考えております。

それから、学力低下ということに関しましては、やはり東大も例には漏れませんで、「学生の能力が落ちて数年前と同じことができなくなってきた」ということが書かれております。それから昨年度で問題になりましたが、家庭、自宅での学習時間が少ないことが指摘されています。「東京大学ではこのような“出席だけはしているが家では何もしない”という学生を相手にして授業をしているということになります」と紹介されています。これはなかなか対応策が難しいと思います。自宅学習をどのようにさせるのかということで、他大学でも非常に苦労しているということが見てとれます。次に板書なのですが、本学教員の多くの方も問題点として取り上げていらっしゃいますが、「黒板に書くということは間を持たせるという意味と、学生に余裕を与えるという意味があります」と紹介されていま

す。次がやはり本学と同じような悩みなのですが、「ただでさえ、教員の話を聞いて、それを自分の言葉で要約できない学生が増えているのですから」ということが、アンケート結果に基づいて紹介されております。

最後に５ページへまいりますが、昨年度初めて本学で実現されました「授業計画改善事例集」が皆さんのお手元に届いていると思います。これをぜひ皆さんごらんになって授業改善に生かしていただきたいと念願しておりますが、ざっと目を通しまして、やはり幾つか、非常に多くの先生に共通した悩み、共通した努力がはっきり見えてまいりましたので、ここで簡単に紹介させていただきます。

まず、授業の方法についての技術的な工夫ということでまとめました。前回の復習を必ず入れるとか、あるいはリアクションペーパーとか、ふりかえり票、あるいは復習プリント等々というように、講義とはいえ常に学生の理解度を点検しながら講義を進めていらっしゃる先生が数多くいらっしゃるということが、読んでいてうれしい驚きでした。それから、かなりの受講者を抱えながらにもかかわらず、小テスト、ミニテスト等々、講義内試験を実施していらっしゃる先生もかなりの数に上るということが分かりました。

それと、ちょっとどこに書いていいのかが分からなかったので５ページの一番下に書いておきましたが、「教員は学生を出席させてなんぼのもの」という認識を持たねばならないのではないかという指摘をなさっている先生もいらっしゃいました。やはり授業アンケートの回収率といいますか、授業の出席率をどうか高める努力をしていただきたいと切望しています。

次に、授業の内容に関する改善計画では、これもはっきり二つほど大きな傾向が見えまして、一つは具体性です。今の学生に理解させる、あるいは90分緊張を保たせるために、身近な具体例、具体的事例の説明、日常生活との関連を一層明確にするということで工夫なさっている先生が数多くいらっしゃいます。それともう一つは、講義の間に一度は考えさせる時間を与えたい、そうすることによって参加意識を高めるという工夫をなさっている先生もかなりの数がいらっしゃるということが分かりました。

最後に、改善のポイントとして一番多く学生からリクエストがあり、あるいは多くの教員の方がいろいろ試行錯誤を繰り返していらっしゃるのが板書だと思われます。資料の最初に書いてありますように、なかなかノートを取ることができない学生が多いということを指摘なさる先生も多いのですが、それを踏まえたうえで、更に、ノートに写せば後で見ても分かるように板書するというところから始めて、次第に学生が板書できる訓練もしていくという努力をなさっている先生も数多くいらっしゃいます。中には、漢字には読み仮名を振るということまでなさってくれている先生がいらっしゃいます。

そのようなことを踏まえ、前回は主として講義科目でしたが、今回は７、８ページに再録しておきましたような演習科目についての授業改善計画をテーマに取り上げた次第です。

最後に２点、皆様にお願いしたいことがございます。まず、お手元に昨年度の授業アンケートの結果が届いていると存じますが、今回も授業改善計画書の執筆をよろしくお願い

いたします。それから２点目は、授業アンケートを今年度も６月下旬と 12 月初旬に実施いたしますが、ご協力をよろしくお願いいたします。その際に、授業コードを正確に学生にお伝えいただくようお願いいたします。授業コードは毎年改良を加えておりますので、必ず今年度の授業コードを正確に板書して学生にお伝えいただくよう、重ねてお願いいたします。

では、四つの学部の１年次演習のご担当の方から、ご自分の演習についての授業改善計画と組織的取り組みについて、ご報告をお願いいたしたいと思います。

（町田）

はい。最初に太田教務部長から、現状の確認と本日のＦＤに際しての問題意識についてお話をいただきました。それでは時間も迫っていますので、早速、各学部の代表者ということで、４名の先生方にお話をいただきます。まず最初に、法学部の萬歳先生からよろしくお願いいたします。

事例報告①（萬歳寛之法学部専任講師）

どうもこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、法学部の萬歳です。法学部の取り組みというのは各学部の中でも最も組織性が高く、さらに今年度、法学部の基礎演習科目につきまして特色ある大学教育支援プログラムにも申請したということで、まず全体の概要をご説明しながら私の授業改善計画等に踏み込んだ話をしていきたいと思います。

私のほうのレジュメはページ 10 から始まります。そちらをごらんいただきたいと思います。ページ 10 とページ 11 が報告レジュメになっておりまして、ページ 12 からページ 23 までが資料という形になっております。適宜、ご参照いただければと思います。では 15 分のみの報告だということですので、早速報告に移らせていただきたいと思います。

まず、法学部初年次演習の概要と課題ですが、はじめに 1.「法学部教育における基礎演習」につきましてはページ 12 の資料１をごらんいただきたいと思います。このページの一番下のところに図が出ておりますけれども、基礎演習から４年次の発展演習まで、法学部では今年度からすべて必修となりましたが、１年次演習から４年次演習までざっと矢印で貫くような形で、最終的に法的素養と豊かな人間性を備えた社会人をつくる、これが目的となっております。その根拠につきましては、このページの（２）の「取り組み実施プロセスについて」という欄に学則第１条が載っておりまして、この第１条にのっとり、手作りの教育、愛情教育という教育理念に基づいて１年次演習を行っていくということになります。

では、この愛情教育、手作りの教育ということを実施するに当たって、まずどのようなクラス編成をしているのかということです。レジュメのほうに戻っていただきたいのですけれども、基礎演習というのは法学部では原則として一つの語学クラスを二つの基礎演習クラスに分けまして、13 から 14 名の学生数とするということになっています。ただし、

今年度から法科大学院の設置にかんがみまして、希望者の中から必要な場合には選抜のうえで特別クラスを新たに一つ設けることといたしました。私のクラスからは１人特別クラスに行きましたし、いない先生もおりますし、３名も行ってしまった先生もおります。このような形で、従来のクラスは基礎演習は語学クラスを二つに割り、その中から必要な場合は選抜をして法科大学院用のクラスに行ってもらうということになっております。

このような取り組みを考えている基礎演習ですが、２に移りますけれども、基礎演習という科目の名前の由来は、「手作り教育による基礎的能力養成のための１年次演習」、これをぱっと縮めて「基礎演習」という形になっております。私も今回勉強して初めて知りました。手作り教育による基礎的能力養成ということが一番の眼目にあり、その際、手間暇かけた手作り教育の実践の一部として１年次演習を行っているということになります。

私が担当してきた経験上から、基礎演習の特徴というものは大きく学生生活面と学習内容という側面に分けて考えることができると思います。学生生活面ですが、まず最初に考えられるのは、年度当初の導入ガイダンス期間における役割です。この年度当初の期間に、クラス単位で行動はしますけれども、オリエンテーションキャンプ等々に張りつく教員は基礎演習の教員が適宜交替で張りつくことになっておりますので、友達が少ない、また相談をだれにしたら良いのかが分からない中で、知っている顔が適宜現れるということは、１年生の最初の段階ではとても緊張を和らげる効果があるのだろうと思っております。また、資料２に添付いたしましたけれども、ページ **13** から **14** ですが、学生情報カードというものを作りまして、担当教員が学生指導用の資料として使うことになっております。これは１年次の最初の基礎演習の授業のときにしっかりと書いてもらい、基礎演習の担当教員は１年次と２年次のＦＡということで担任をし、３、４年のときには発展演習の教員がＦＡになるということで、これは４年間を通じた学生指導の基礎資料になるということであります。

次に学習面ですが、学習面は何を教えるのかという学習内容と、どのように教えていくのかという学習指導体制の二つに分かれると思います。基礎演習として法学部が教えようとしている学習内容ですが、それはここに挙げました①から④の四つの要素を学生たちに教えていきたいと思っているわけです。

では具体的にどのようなことを教えていこうと思っているのかということにつきましては、資料５、ページ **17** から **18** をごらんいただきたいと思います。ページ **18** の表１というところに、昨年度の年間授業計画表が載っております。これを見ていただければ分かっていただけると思いますが、春学期にはまず「読んでまとめる」という授業が一番多いということです。このように読んでまとめるという形で読解力や文章構成力、文章表現力という日本語能力を高めていこうという意義があります。また、秋学期に入りますと、「聞いて見てまとめる課題処理の方法」というのがありまして、課題処理の方法を通じて情報収集および整理能力の涵養ということが図られます。最後のクライマックスとして、秋学期の「ゼミ発表と討論」という５回にわたる授業を通じまして、日本語能力の中でも特にプレ

ゼンテーション能力を向上させていこうという考え方がございます。

社会人としてのマナーについてですが、それは春学期の昨年度ですと第６回目の授業、今年度ですと先週になりますが、先週にビジネスマナー講座といいまして、外部講師をお呼びして合同実施授業で彼らにマナーを教えるということをやっております。

また、基礎演習の中での眼目の一つは、漢字テストを適宜行うということです。その点につきましてはページ 17 の（３）ですが、現在は漢字テキストとして『漢字検定２級・準２級』というものを使用しております。これは警察官志望の学生たちが要求される漢字のレベルが２級、準２級だということにかんがみまして、このテキストを採用しております。今年からはこの漢字テキストがすべて終わるような形で、各クラスで共通の漢字テストを行うように教務委員会が責任編集をして、16 回分でしたか、その分ができ上がっております。

このような形で学習内容というものを計画しているわけですが、では、どのように学習指導体制を執っているのかということです。法学部の特徴としましては、学部としての一体的取り組みを重視しているということです。その際、学部としての一体性がまず如実に表れる部分といいますと、資料３と４、ページ 15、16 をごらんいただきたいと思います。ページ 15 の資料３は共通シラバスです。これは各学部にあると思いますが、特にわれわれ教員が参照しながら毎週使っているのが、ページ 16 の「実施上の注意点」というものです。これをごらんいただければ分かりますように、第１項から第 13 項まで、どのようなカリキュラム内容でゼネラル・ガイダンスに従ってやっていくのかということが細目にわたって書かれております。しかし、これによってがんじがらめにしてしまうと面白い教育ができないということで、この辺をぎりぎりのラインにおいて、適宜、テキスト等の選ぶものについては各教員に任せている、ということになっております。

このような形で一体的取り組みを行っているわけですが、その組織性というのはもう一度ページ 12 の図のほうに移っていただきたいと思います。基礎演習というものの枠の隣に、教授会からざっと下に降りていろいろな組織が書かれておりますが、特に教務委員会が責任を持って基礎演習のいろいろな資料等々を作っているということです。その中でも、教務委員会の下にございますコーディネーター、これは教務副委員長が就任しておりますけれども、このコーディネーターがいろいろと情報ソースとなりまして、各教員からの情報を集め、それをまた各教員にバックさせていく、そのような作業を営んでおります。実際にどのようなことをやっているのかが下のポツに掲げられているわけです。

このように、学習内容という面である一定程度の向上をさせるポイントを四つに絞り、また一体的な取り組みをしております。しかし、実施上の問題点というものはやはりございまして、それについては次の３、ページ 11 に移りましてご説明していきたいと思います。

まず、このような制度面を実施していくに当たって、最初に学生生活面ですが、少人数制クラスの長所と短所というものはやはりございます。まず長所ですけれども、ゼミにおける学生同士の触れ合いというものはものすごく取れる、そのようないい面があると思い

ます。この点につきましては、ページ 20 のところに演習の法学部全体の総計というものが出ているのですが、クエスチョン 14 の「何が身についたか」というところで、コミュニケーション能力が 87 と圧倒的多数であることから分かりますように、基礎演習を通じて学生同士の触れ合いという部分はかなり成功しているのだろうと思います。

しかし、実際に少人数制クラスですと、そこからはじかれてしまう学生がおりまして、学生間のトラブルが起こった場合、これに教員がどのように対応していくのかということがファカルティー・アドバイザーとして重要になってくると思われます。実際に、女の子同士でうまく人間関係が取れなかったということで、私のクラスでも退学してしまった子がおりましたし、また男でも取っ組み合いのけんかをするような者が出てきたりしました。そのような者が出てきたときに、ファカルティー・アドバイザーとして、基礎演習の授業そのものが原因にはなっていないのですが、基礎演習というのは法学部の場合５回以上は休めないという制度になっておりますので、はじかれた学生をどのように迎え入れて授業を進めていくのかということは、学生生活面という観点からは重要になってくると思われます。

次に学習面についてですが、これは 2004 年度の授業アンケートを分析していきたいと思います。私個人の授業改善計画そのものは資料の７に載せてありますので、後でご興味のある方は参照していただければと思います。私の個人的な感想と全体の傾向というものがかなり一致しておりましたので、全体のものを中心としながら考えていきたいと思います。

まず、学習面の中でも「教員の努力と学生の反応」という部分ですが、アンケートを見ておりますと、教員の努力と学生の反応というものについて興味深い傾向があるなと思います。欠席回数という部分につきましては、５回というのが決まっておりますので、欠席がすごく少ないというのがあるわけですが、その他の質問項目、「教員の意欲」、「参加の促進」、「演習の進度」に関しては、学生からも一定の評価を得ているのだろうと思います。つまり、授業時における法学部の教員の努力は学生側は認めてくれているのではないかと、アンケート上は見受けられます。しかし他方で、学生側の受講姿勢で「テキストは役に立ちましたか」、「活発でしたか」、「内容理解はどうですか」、「知的満足度はどうですか」ということに関して、否定的な回答は少ないと言えますが、微妙な達成感で、「どちらとも言えない」と回答している学生の多さは注目に値すると思います。それから、学習時間の少なさからも学生側の学習姿勢に問題があると言えますが、基礎演習による知的刺激にも一定の限界があることが示されているのだろうと思います。つまり、「先生は頑張っているのだけど、本当に自分たちは理解できているのかな」という自信のなさが、このアンケートの中に出てきているのではないかなと思います。

私のところも、資料６のページ 19、内容理解のところで、「大体理解できた」という人が一番多かったり、微妙な達成感であるというのはそれなりに、私のほうから「そんなすぐ分かったような顔するな」と言われたからかもしれませんが、微妙な達成感にとどまっているという部分は、ここのところをどう反省すれば良いのか考えていく必要があると思

っております。

この点はやはり、学習内容の浸透度というところを考えなければいけないと思います。基礎演習の眼目が、先ほど申しました四つの項目にもあるにもかかわらず、また資料のページ 20 を見ていただきたいのですが、「何が身についたのか」という項目に関しましては、プレゼンテーション能力、日本語の表現能力、調べ学ぶ能力、文献の読解力、この四つの項目についてがいわゆる基礎演習の眼目にあるわけですけれども、これについてきちんと回答しているのが 12%や 10 数%に過ぎないということです。ですから、身についたものとしてコミュニケーションを挙げている学生が一番多いということは、基礎演習を通じて友人ができて、学生生活面での充実感はあるのだろうと思われます。しかし学習面での成果を出すためには、例えば多重Ａの改善のポイントを見ますと、テキスト配布資料および学生同士の意見交換という部分についていろいろな多くの意見が出てきておりますので、この点に絞って教員側の努力がさらに求められるのではないかなと思います。

ただし、このアンケートは、まだ基礎演習の授業科目の中でみんなの前で発表するという最後の部分がきちんと行われていない段階で行われましたので、最終段階で法学部独自のアンケートを集計しますと、「それなりにコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力というものが自分に身についた」と答えている学生もおりますので、その点は差し引いて考えましても、とにかくやはり配布資料の部分については今後も注意が必要であろうと考えております。これは私自身が自分で行ってきたうえでも、そのような反省をしております。

最後に成績の評価の部分ですが、このように一体的な取り組みを法学部は行っておりますけれども、実は、ページ 23 を見ていただければ分かると思いますが、成績評価につきましてはかなりばらばらの分布をしております。これにつきましては、あまり厳格に定めるというわけにもいかないのでしょうけれども、教員間の当たりはずれというものがあっては学生がかわいそうですので、統一的な成績評価ということは少し考えたほうがいいのではないかと思っております。

また、プレゼンテーション能力の向上のための授業というものをやる際には、トラブルを抱えた学生、特にはじかれてしまった学生というのは、そこで発表したくないと言って出てこなくなってしまったりします。その場合、プレゼンテーション能力を向上させるに当たって、学生が出てこられなくなった場合にどのようにして対応していけばいいのかという問題も残ってくると思われます。これは実際に私自身が抱えている悩みでもあります。

また、基礎演習というのは、本学に入学してくる学生の学力低下に対応するためにまずは設置された科目だったものですから、資料の最初のページ 12 に出ているように、１年次から４年次まで貫くというのではなくて、実は高校から大学にかけての接続授業であるということです。ですから法学部の場合は、２年次演習に向けてどのようにして基礎演習を有機的に連関させていくのかということはまだ課題未処理ということになっておりますので、その点も法学部としては一体として取り組んでいく必要があるのだろうと思っており

ます。

個人的な、どのようなところを反省しているのか等々につきましては適宜、後の議論でご質問いただければと思います。15 分たちましたので、私のほうからはこれで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（町田）

はい、どうもありがとうございました。法学部の萬歳先生からお話をいただきました。引き続きまして、現代文化学部より木塚先生にご報告をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

事例報告②（木塚隆志現代文化学部助教授）

現代文化学部の木塚でございます。現代文化学部のスタディ・スキルズについて報告させていただきます。25 ページを開いていただきたいと思います。まず、前半はどのようにやっているかという概要をお話しして、後半部分では問題点、改善のポイントというところをお話ししたいと思うのですが、全体にわたって授業アンケート、特に現代文化の全体、スタディ・スキルズ全体に対する授業アンケートの結果に基づいて見ていきたいと思います。

まず最初に概要のところで、クラス編成からですが、現代文化の場合は６クラスある語学クラスのそれぞれを半分に割りまして大体 14、15 名という形で１クラスをつくっています。一つの特色は、２クラスについて教員２人で春・秋に交替して行うという形をとっています。例えばＡⅠクラスは教員①が春学期、教員②が秋学期、それと組になっているもう片方のＡⅡクラスは教員②が春学期、教員①が秋学期と、このような形で二つずつ組んで教員が交替するという形をとっております。これは、その下に書きましたように、クラスごとに出てくる授業の差異の是正といいますか、是正できるわけではないので、それを和らげるといいますか、効果があるのではないかということですが、特に少人数のクラスですので、どうしても教員との相性というものが出てきます。それで春・秋に教員が替わるというほうが望ましいのではないかということです。アンケートの結果を見ましても、34、35 ページに全体のものがあるのですが、特に 35 ページのほうを見ていただきますと、秋学期のほうですが、「教員の意欲」が 2.4 から 1.3 まで、「活発さ」においては 3.8 から 1.4 まで非常にばらつきがありますので、やはり同じ教員で１年間ずっとというのはちょっと学生にかわいそうかなというところです。そのような意味合いがあるのではないかということです。

２番目の授業計画のほうに移りたいと思います。授業計画なのですが、現代文化学部は学期ごとに大きく二つに内容を分けていまして、春学期は読解、文章理解、文章要約、作文、特に情報を受け止める作業、これをやっていきます。秋学期はむしろ情報を発信する、いかにして発信するかということで、プレゼンテーション・レポート作成というのを中心

にやっていくというように大きく学期で分けております。ただ、先ほどの法学部の場合ですと学習面にこれが当たるのですが、学生生活面のほうもやっておりまして、特に春学期では大学に慣れる、履修指導を兼ねて大学に慣れる、あるいは早いうちから将来に目を向けてもらうという意味合いから、さまざまな取り組みをしております。

これについては資料の後ろの 28 ページをごらんいただきたいのですが、ここに年間の計画表が 28、29 ページであるのですが、その春学期のほうです。法学部とかなり共通している部分があるのですが、例えば前半の２回から４回のところに「学生情報カードの記入」というのがあります。これは形式、用紙自体はこの後お話しいただく経済学部のほうと同じ様式のカードを使っているのですが、学期初めに目標を立ててもらって学期の終わりに教員がコメントするという形のものになっています。それから中盤の「理解し、まとめる」の最初のところを見ていただくと、講演を聴いてノートを取り、内容をまとめるというのがあります。先ほどの法学部ではマナー講座があったのですが、現代文化では学外から特別講師をお招きしていろいろ話をしてもらうということをしております。これは、そこにも書いてあるのですが、ノートを取るノートテイキングの練習というのが趣旨なのですが、それだけではなくて、やはり社会で活躍している人の話を聴いて外に、あるいは将来に目を向けてもらうという意味合いでやっているということになります。それから後半部分で、12 から 15 回のところに「研究室に１人ずつ呼んで面談」というのがあります。これも、研究室に学生を１人ずつ教員が呼んで、何らかのテーマについて話し合うということをやるわけなのですが、きちんとしたコミュニケーションが取れるようにというマナーの意味も含んでいます。それから、その１人ずつ呼んでやる面接の裏側で、待っている学生に対して、就職のときに出るような常識試験問題をやってもらう。将来必要になるような知識がどのようなものか、早くから触れてもらうというようなことをしております。

元に戻っていただきたいのですが、25 ページのアンケートを見ますと、「何が身についたか」という項目で、春学期では一番多いのが基本的なものの見方、２番目が文章の理解力であり、秋学期ではプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力というのを多くの学生が、これは全学平均に比べてかなり高い数字で挙げているということが見られるわけです。この結果を見ると、学生が授業の内容、学期ごとの目標、テーマといったものをかなり理解し意識しているのではないか、そのような面ではうまくいっているのだろうというのが分かります。実際にその能力が本当に身についたかどうかは別として、学生が何をやるのか、すべきなのか、何をねらっているのかというのを理解しているという面では成功しているのではないかということです。

次に３番目の項目に移っていきたいのですが、もう一つの現代文化の特徴は、共通テキストの使用という点にあります。共通テキストといっても、これが現物で春学期と秋学期、年間２冊になるのですが、このようなテキストを配っています。テキストといっても、タイトルが資料集となっていますように、春学期で言えば読解を指導する際の、内容要約・文章要約などをさせる際の元になる文章、それを集めて載せてあるというのが主な内容と

なっています。ですから先ほどの法学部とは逆で、使う資料、使う文章の部分を共通化しようという発想になっています。秋学期のほうはプレゼンテーション、レジュメ作成の手引きのような、これらのやり方の手順を書いたようなものになっています。

そこに書きましたように、全員が必修の１年次演習で、４年間に必要なスキルを身につけるという授業ですので、クラスごとに身についたスキルズが違っていたのではかなり困るので、どの教員がどのクラスでやっても共通のスキル、内容というものがある程度、保証されるような形というものを考えてやっていくということになります。ただ、問題点がまだありますので、それについてはこの後、問題改善のポイントのところ、２の(２)のところで見ていきたいと思います。

次に２の問題点ですね。改善のポイントのところに移っていきたいのですが、最初にアンケートを見て目立って見えるのが、先ほども話にありましたが、学生同士の意見交換です。改善ポイントで「学生同士の意見交換」を指摘する学生が非常に多いです。春学期で言うと43.9%、秋学期で41%と、非常に全学平均に比べても高い数字が出ているということです。これについては、全体もわたしのほうも同じなので、ちょっと参考にわたしの授業改善計画書ということで24ページのほうを、１枚戻って見ていただきたいと思います。

ここを見ていただくと、（３）の特に②のところをごらんいただきたいのですが、「（２）でも見たように」となっていますが、「議論の活発さにおいて肯定的な回答が得られているにもかかわらず、改善ポイントにおいて学生同士の意見交換と50%の学生が回答しており議論にまだ工夫が必要と思われる」ということで、（２）のところを見ていただきますと分かりますように、参加の促進や討論の活発さ、それから「身についたもの」でもコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力という回答が非常に多いので、これについては決して授業の評価が悪いわけではありません。にもかかわらず、改善ポイントで学生同士の意見交換に非常に高いポイントが出ているという、ある意味で少し矛盾したような感じもするのですが、こういった数字が出てきています。要するにこれは教員と学生というコミュニケーションの軸に比べて、学生同士、学生と学生のコミュニケーションの軸というのがやはりまだ足りないといいますか、持っていき方に工夫が必要なのだろうと思われるということです。

わたしの場合には、その下の改善書を見ていただくと分かるのですが、この点については「グループを単位とした学生同士の討論や課題の取り組みを授業に取り入れることで対応していきたい」というような回答をしています。グループ同士で、２、３人のグループで課題に取り組ませたり、グループ単位で討論をやらせたりというようなことをもっと取り入れていきたいとわたしの場合には対応として考えているということです。全体についてもこれと同じように、全体として「討論の活発さ」は評価が高いのですが、やはり、それにもかかわらず「学生同士の意見交換」のポイントが高いということで、この点はもう少し工夫が必要なのだろうというのが第一の問題点です。

２番目はテキストのほうになりますが、テキストのアンケートを見ますと、クラスごと

に評価が非常に大きく異なっている。大きくといいますか、改善点でテキストを挙げるのがゼロの場合もあれば、30%以上挙がるクラスもあるということです。テキストに対しての評価がまちまちである、これはこの資料集自体の使い方に各先生でかなり差があるのが現状だということで、このようなことになるのだろうと思います。ただし、このような傾向ですと、その下に書きましたように、テキストの内容、使っている、載せている文章の適否等を全体として検証していくのが非常に困難であるということから考えて、できるだけこの差をなくしていくという意味で、使う文章、資料の部分のみではなく、その使用のしかたについてもある程度、共通化を検討することが必要なのではないかと思われるということです。

これについてはもう既に今年始めておりまして、先ほどの計画表、28 ページのほうを見ていただくと、網掛けの部分があると思いますが、網掛けの部分の中盤の「文章を読んでまとめる」の部分に、「資料集から２本以上選び」という部分があります。一定量は必ず資料集から文章を使ってくれというようなことを今年から始めております。あと、もう一つ、教員用のマニュアルというのも似たような表紙なのですが作りまして、文章の使い方といいますか、載っている文章の解説のようなものがマニュアルとして載せてあります。このようなものも今年から配って対応するようにしたということですね。使い方についても共通化の検討が必要になってくるだろうということです。

次に、３番目の学習時間のほうを見ていただきたいと思います。これがアンケートを見ると非常に理解に苦しむ数字でして、どのクラスもほぼ毎回課題を春学期については出しているはずなのですが、学習時間が 30 分以下あるいは０分の学生の合計が春学期 73%、秋学期 68%という数字になっているという、非常におかしな理解に苦しむ数字が出てきているというわけなのです。それから平均ポイントのほうで見ると 4.1、3.9 ということで、全学平均に比べてやはり悪いポイントが出ている。これを見ますと、科目の性格上、家で何もしないというのは非常に困るので、これはやはり重要な改善ポイントということになろうかと思います。これについてはやはり何か考えていかなければいけないだろうということです。

それから最後に成績分布の部分になるのですが、クラスによって結構幅があるようにも見えるのですが、ただ、A評価・B評価を合わせて見ますと、A評価が少ない人はB評価が高いというわけですね。A評価・B評価を合わせて大体半分以上、６割以上という見方ができるのではないかと思います。ざっと大まかに見ると、それほど問題がある分布ではないのではないかというように思います。Aが 100%の先生、Fが 80%の先生と、そのような形ではありませんで、大体６割以上の学生がAかBという形が取れていて、C・Dが少なくて、F評価の学生、これは特に出てこなくなった学生がほとんどだと思いますが、これがクラスによって出るということになります。

これについては、法学部のように何回以上欠席したらだめというのはうちの学部の場合にはないのですが、スタディ・スキルズのメンバーでいろいろ話し合いを初期のころから

する中で、大体暗黙の了解といいますか、出席あるいは課題の提出というものを中心に、例えば何回以上欠席したらＡはやらないようにしようというような、大体の合意形成が全体的にできています。そのせいでこのような数字が出てきているのではないかと思われます。ただ、この点についてもやはり、認証評価のほうでも成績基準の共通化といいますか、公正化というのが非常に求められておりますので、対応は考えていかなければと思われます。

ざっとそのようなところで、非常に急ぎましたので不十分な説明になりましたが、報告を終わらせていただきたいと思います。

（町田）

はい、どうもありがとうございます。それでは引き続きまして、経済学部の久持先生、よろしくお願いいたします。

事例報告③（久持英司経済学部助教授）

経済学部の久持でございます。失礼させていただきまして、座った形で報告とさせていただきます。慣習的には恐らく設立順なのでしょうか、法学部、経済学部、文化情報学部、現代文化学部という順に報告なり掲載なりというような形になるのでしょうが、今回につきましては、萬歳先生と木塚先生にはそれぞれの学部全体での取り組みをどのような形で取り組まれているか、あるいは全クラスの学生の評価ということを中心にお話しされるということで、その後の二つの学部、私のところの経済学部と内藤先生の文化情報学部では主として個人の取り組みを中心に扱ってほしいというようにおおせつかりましたので、このような順になったと私は解釈しております。とりわけ、経済学部におきましてはプロゼミナールという名前での１年次の導入教育でございますが、こちらは各教員の自由裁量にかなり任されている部分があります。まず資料は、経済学部に関しましては私の授業改善計画書があります 37 ページから始まりまして 50 ページまでという形になっております。そのうち、38 ページのレジュメの箇所、こちらを中心に話を進めていきたいなと思います。

私どもの経済学部での学部全体の取り組みを、まず少々報告させていただきます。経済学部におきましては 2003 年度より現在の形になっておりまして、ＦＡ制度を設けたのが 2003 年度、語学のクラスに２人のＦＡが配置されまして、それぞれがクラスの半分のプロゼミナールを担当するというようになってございます。先ほど申し上げましたように、例えば次の 39 ページのシラバスをごらんいただければお分かりかと存じますが、幾つかの共通事項を除きまして、授業の内容ですとか使用する教材ということに関しましては、各教員の自由裁量に任されております。

では、どのようなことが最低というのもおおげさですが、どのようなことが共通事項として合意形成されているかというようなことに関しましては、38 ページにズラズラと並べておりますが、シラバスにも「読む、聞く、見る、書く」とございますように、書いてあ

る文章、あるいは他人の口頭による説明、ＶＴＲ等による説明を使用して、学生がその内容を理解し、要約し、文章を書くということを中心にしたスキルの養成というのが中心になっております。そして参考書として『知へのステップ』という教科書の活用ということもシラバスにございます。ただし、すべてを使用する、あるいは全く使用しないということに関しましては自由ということになっております。その後、幾つかだけを挙げさせていただきますと、５番目に関しまして、こちらも割と以前からすべてのクラスにおいて共通の事項となってございます。夏休みの課題としてドクシンショで、こちらは本それ自体もやはりそれぞれの先生方の自由という形になっております。基本としては２冊を指定して１冊をというような話も多くの先生方が、そのような形で指定されている先生方が多いと伺っております。

では、このような合意事項に関しましては通常はメーリングリスト、それぞれの年度によって私たちの学部では担当する教員が毎年替わるローテーション制というようになっておりますので、この点もほかの学部と違うかと存じますが、毎年新しいメーリングリストを作成いたしまして、その中でほかの委員会ですとか、あるいは各教員の情報交換を行っております。そのほかに直接顔を合わせるといったような形では、下の方に書いてございます、ミーティングというものを年２回ほど、大体は各学期の終了のときに実施しておりますが、それを担当者間で行いまして、担当者間で情報交換を行っているというように行っております。ご参考までに、44 ページからは 2004 年度の終わりに行いました、まとめ会の議事録を掲載させていただいております。このときに主に議題になりましたのは、どのようなことをプロゼミナールの中で実施しているかということ、あるいは先生方それぞれがどのような工夫をした授業をなさっているかというようなことをお互いに報告して、情報交換をしたということです。

そして 45 ページの後半のほうになってきますと、2005 年度からは全クラスで共通に何らかの形でプレゼンテーションを実施しようではないかというような形になっておりました。このプレゼンテーションは特に何かパワーポイントを用いるとか、そのようなことではなくて、とにかく学生に報告をさせるというようなことを実施するということで意見が一致しております。それからもう一つ、2005 年度から新たに全クラスで取り入れようということになりましたのは、就職と絡むような何かしらのことを行おうということです。どうしてもこれは、もっと細かい話になりますと、それぞれの先生方のご希望によりまして、例えば数学の計算力が落ちているので数学に関してもっと詳しい話をプロゼミナールでやろうとか、あるいは経済学の用語、経営学の用語に関してもっと細かいことをやろうとか、パソコンの操作のしかたについてもっと細かいことを実施しようなど、いろいろなご意見がございましたが、結局その点に関しても文系、理系、理数系、どのようなこととか内容を問わずとにかく就職に絡むというようなことを取り入れましょうという形でコンセプトは合意ということになりました。

それで、ちょっとレジュメの 38 ページに戻りまして、以上のような形で、私どもは各教

員の裁量に任せると言いながらも、なるべくさまざまな点で情報交換をしつつ、それほど大きな縛りはなくとは言いながら、幾つかの合意に基づいて共通の事項を行おうというような形で行っております。したがいまして、ほかのこれまで発表された学部と大きく異なる点といいますのは、先ほど申し上げました、年度によってプロゼミナールを担当する教員がローテーションで行われるということです。したがいまして、大体２年か３年プロゼミナールを実施して、１年間は担当しないというような形でカリキュラムの担当が組まれているということでございます。

もう一つは合意形成についての関連ですけれども、内容についての合意形成はいろいろ行われておりますが、採点基準の中身については今のところ特に合意形成が行われているわけではありません。その結果といたしまして、50 ページの一番最後のところにございますが、これもほかの学部の先生方もおっしゃっておりましたように、やはりクラスによって評価の内容がばらばらになっております。出席者、履修者全員がＡ評価というところもございますし、２割程度がＡ評価というようなところもございます。

続きまして、個人的な取り組みというような形で進めさせていただきたいと思います。経済学部は各教員の自由裁量というのが大きく行われておりますので、あまり学部でのことを細かく申し上げても意味がないというようなことかもしれません。したがいまして、割と個人の内容に関して述べさせていただきたいと思います。37 ページのところの改善計画書を主にお話を進めたいと思います。

この改善計画書が 37 ページ、それからアンケートの、私のプロゼミナールに対する学生の評価というのが 47 ページにございます。正直申し上げまして、47 ページをざっとごらんいただきますと、私の評価は極めて良くないというようになっております。37 ページのほうでは、私は昨年担当した１年生に対しましては非常に評価が高いと思っていました。非常によくできる学生たちだなと思っていました。教員の学生に対する評価は高かったのですが、学生の教員に対する評価は低いというような状態でございました。

その内容を見てまいりますと、大きくプロゼミナール全体の平均を下回っているのが、「意欲」と「参加の促進」というようなところでございます。人数が少ないこともございますし、非常に低い点数を出す人が１人いたり、非常に高い点数を出す人が１人いたりということになりますと、評価のちょっと結論を出しにくいところがございますけれども、少なくとも意欲に関しては非常に、全員そろってかなり辛い点数がついているということです。講義そのものは、２限目でございましたのでかなり時間をオーバーさせたりすることもございましたが、そのような時間がどうだというようなことではなくて、やはり時間の中での熱意だとか意欲だとかいったことに学生は専ら目を向けているのではないかと思います。それから、「理解」や「知的満足度」という場所に関しましては、そこそこの評価を学生から受けていますけれども、これはプロゼミナールの特徴点といたしまして、うちは１回完結の内容が多いということが影響しているのではないかと思いました。改善計画書の３番目のところにまいりますと、「進度」に関しましては 80％程度が適切というよう

に答えておりましたが、これもやはり１回完結というような形で１回ごとに違う内容のことを行っているということで学生の興味が続く、あるいは１回で終わるようなことしかやらないということなので、そのようなことの内容があまり高度な、そのようなことまではやらないということなので、理解あるいは興味が続くというようなことがあるのではないかと思いました。

改善のポイントに関しましては、大きく三つの要素がございました。「パソコン」、「学生同士の情報交換」、「ＶＴＲの使用」ということでございました。ちょうどＶＴＲはこのアンケートを取った 11 月以降から使用することになりましたので、この辺は何とも申し上げられませんが、学生同士の意見交換に関しましては、今年度より秋学期からプレゼンテーションを実施するということになりましたので、こちらのほうは改善されることになるのではないかと考えております。ただパソコンに関しましては、ノートパソコンを６月以降はほとんど毎回持って来させて課題をそこで入力させて、わたしのフラッシュメモリーでコピーして提出というようなことを行っていたので、これで改善の余地がありというようになったのは、私もちょっとまだよく理解が、分析ができておりません。

それから、全体に関しましては、先ほど申し上げましたように、２限目ということでしたので昼休みまで長く延びるというようなこともありました。これは、私の考えでは学生に課題を完成させることによって満足感を得る、達成感を得るということを重視していたわけなのですが、どうも学生の考え方はそうではなく、時間を延ばすとかそのようなことに関しましてはあまりいい印象を持っていないということですね。しかも、その課題を時間内に終わらせるということを重視しましたので、家で宿題や課題を出すというようなことにはあまり頭が回りませんでしたので、学習時間は低い、少ないというような形になりました。

そのほか、教材に関しましても平均よりやや高いという意見を学生からはもらいましたけれども、こちらに関しては自前の教材、あるいは共通教材、先ほど共通の事項の中で共通教材という項目をあまり説明する時間がございませんでしたけれども、基礎的なグラフの見方ですとか表の見方、あるいはインターネットを使ったレポートの作成のしかたというようなものが、ほかの先生方のお力によってプロゼミナール全体で使用するというような形で共通で行われております。

それで、ちょっと時間がございませんでしたので、私が実際にどのような授業のことを行っていたのかは 46 ページにございますが、この点に関しましては後ほど質疑の中でお時間がございましたらまた説明させていただきたいと存じます。時間がまいりましたので、以上で報告を終わらせていただきます。

（町田）

はい、どうもありがとうございました。それでは最後になりますけれども、文化情報学部の内藤先生、よろしくお願いいたします。

事例報告④（内藤嘉昭文化情報学部教授）

既に終了時間に差し掛かっていますので駆け足でと思いましたが、駆け足というよりもフルスピードで申し上げたいと思います。本日わたしがご報告申し上げたいのは、大きく分けますと２点ありまして、学部全体の運用に関してということ、もう１点はわたし自身の授業改善について、この２点を中心に15分以内でお話ししたいと思います。

まず、ごらんいただきたいのは52ページです。ここに「オリエンテーション・ゼミナールの運用に関する報告書」というタイトルで報告が載っています。まず、この位置づけなのですけれども、現在、文化情報学部では2006年度の学部改革に向けていろいろな当カリキュラムの検討を行っているところであります。わたし自身は基礎教育にかかわるワーキンググループに属していまして、この報告書というのは昨年度、その基礎教育に関する報告を学部の懇話会で発表したときに作ったものです。ですから、これは必ずしも学部でオーソライズされたというものではなく、多分にわたしの個人的な、私的な報告書というように位置づけていただくほうが間違いないと思います。

概要に関してはごく簡単にご説明いたしますと、オリエンテーション・ゼミというのは2001年より導入された科目であります。この母体になっているのが旧カリキュラムの研究調査法と論文執筆法、この二つであります。それで、オリエンテーション・ゼミナールの特徴というのは、一つはオリエンテーション・ゼミの担当の先生がＦＡを兼任しているということです。ＦＡですから、春・秋同一の教員が担当しているということで、１年間通年で同じ学生を見られますので、きめの細かいケアができるのではないかと思っています。

その次に（２）の「一般的傾向と本学部の現状」というところをごらんいただきたいと思います。この報告書を作るために、昨年の７月にオリ・ゼミの担当教員に意見を聞きました。しかしながら、夏休み直前だったということもありまして必ずしも回答数は多くなかったのですが、そこで返ってきた結果を見ましたところ、すべての教員に共通する項目が１点ございまして、それは学生の圧倒的な学力不足ということをどの教員も異口同音に訴えておりました。この学力不足の背景というものは、そこの下の方にいろいろと書いてあるわけですけれども、これを一つ一つ説明していると到底時間がございませんのでエッセンスだけを申し上げれば、要するに恐らく小学校当時から彼らには学習習慣がないということです。したがって学力がないということではないかと思います。

ページをめくっていただいて、53ページ。今、それでは教員は個々にどのような対応をしているかといいますと、ここでは統一的なテキストというものは使われておりません。したがって、今、教員方はそれぞれ思い思いのプリントなりテキストを使って授業を進めているわけですが、それだけに教員間で成績評価などに関しても極めて格差が大きいという状況が出現しております。共通テキストを使っていないというのは必ずしも、しかしながら欠点ばかりではありませんで、非常に熟練した技量のある教員であれば自分のアイデアを自由に生かせる、そのような非常にいい機会になっているとも考えられます。

しかしながら、昨年の調査結果によれば、どの先生も非常に不満といいますか不安を訴えていたのが、学習上の基礎技術を身につける、すなわち「What」ですね、何を身につけるかということについてはよく分かっているわけですが、それをいかに身につけさせるか、「How」の部分が不透明というようなことが分かってきました。

ページを飛んで54ページに行っていただきたいのですが、それでは本学部ではどのようにしてそれに対応すればよいかという意見が、いろいろ今飛び交っています。結論的に申し上げると、具体的な方法というのがなくて非常に頭が痛いところなのですが、しかしながらそうは言っても、その①にあるように、せめて評価の機軸を設置したほうがいいのかなという気がいたします。例えば出欠については、例えば４回休んでしまってはもう完全に単位を落とす、あるいは遅刻を２分の１の欠席とみなす等、計量化可能な部分については計量化したらどうかなと、わたしは考えております。

②、第２点としては、テキストの問題は先ほど申し上げたのですが、高度なものは使うことができないわけです。その中で、先ほど経済学部のほうからも発表がありましたが、『知へのステップ』を経済学部で使っているようなのですが、これをわたしも見ましたところ、比較的内容的にも平易で扱いやすいのかなという気がいたします。しかしながら分量が非常に少ないわけですので、半期の中で適当な時期に使うという形かなと思います。

それからページをめくって55ページに行っていただきたいのですが、そこに学力不足はうんぬんと、「学生側の消極的姿勢と表裏一体の関係にある」と書いてあります。それで、まことに恐縮なのですが、またページで言うと57、58ページをごらんいただきたいのですが、これは昨年の春学期に文化情報学部で１年次の学生に対して行ったアンケートの集計結果です。この結果は岩熊先生に尽力いただいて出していただいたものなのですけれども、興味深いのは問13から15のところで、５番ですね。「好きな授業、嫌いな授業」という項目なのですが、５番のところで「自分の研究成果を他の学生の前で発表する授業」、これが嫌いと答えた学生が極めて多い事がわかります。実数で53.5%に上っています。それからその下の58ページに行くと、「得意なもの、苦手なもの」というところで苦手なものを見てみると、やはり７番で同じく「調べたことや考えたことを他の人の前で発表する」、これが非常に苦手だという学生が多いことがうかがわれると思います。

このように駆け足で見てきますと、何となく今の学生の実像というものが浮かび上がってくるような気がするわけです。また55ページに戻っていただきたいのですが、とにかく学生というのは個人の考えをみんなの前で発表するということに非常に強い抵抗感がある。そのように言っていいと思います。だとすれば、まず学生同士のコラボレーションを高めて、相互にコミュニケーションをさせつつ課題をこなす。それで互いに発表させる。授業をやっているという感覚よりも、互いに話をさせている感覚で発表というのをやらせたらどうかなと、今わたしは考えております。なかなか難しいのですが。その際に、これはどの先生もそうだと思うのですけれども、学生の中に１人、ムードメーカーといいますか、そのような学生がいると非常にそのようなことが進めやすいと思います。そのためには、

なんと申し上げましょうか、ここに書いておきましたが、「能力のある学生にプラスの影響を持たせる機会を作らせることは、クラスを牽引する可能性が高いため重要」と。クラス内の輪と和を生み出すためにも、そのようなコミュニケーション・スキルのようなものが大事かなと思います。

非常に駆け足で恐縮ですが、今度はページをまた戻っていただいて、あと５分しかありませんが、51 ページ。これはわたしの改善計画なのですが、先ほど久持先生が極めて学生からの評価が厳しいという話をされていましたが、わたしはそれに輪をかけて、恐らく文化情報学部が今年は一番悪いのではないかなと思っていまして、今日は本当にここでお話しするのが非常におっくうだったのですけれども、当たってしまった以上しようがないので話さざるをえないわけですが、そのような意味ではむしろ他山の石といいますか、反面教師で聞いていただけると非常にいいと思うのです。

まず１から順に見ていっていただきたいと思います。授業のアンケート結果全体に対するコメントということで、１点言えることはシラバスを読む者が非常に少ない。これは年々そのような傾向が強くなっている。これはわたしのクラスだけかもしれませんが、そのような傾向にある。2004 年度で見ますと、全く読まなかったという人が 45.5%ですか、このように非常に多くの学生が読んでいないわけですね。

その読み方として、わたしの場合、これは 2001 年度から 2004 年度まで時系列で比較して並べてみたのですけれども、このような全学共通のアンケートというものが実施されるようになったのが 2002 年度からですから、2001 年度に関しては学部独自でやっているアンケートの結果を反映したものです。それから 2003 の秋になっているわけですけれども、2003 の春というのが、どのようなわけか分からないのですが、文化情報学部の教員全員が春に関してはだれもアンケートをやっていません。今となってはなぜそうだったのか、ちょっと分からないのですが、ないのでしかたがありません。秋ということで挙げてあります。

「学習時間」に関して見ると、０分というのが 2004 年度は 81.8%。これはあまりに悪い数字と言わなければいけません。１点だけ自己弁護をすれば、昨年度に関しては授業時間内に直接その課題を与えて要約等の作業をさせたからということで、そのような数値になっているのかなという気もしますが、それにしても非常に改善の余地があると思います。

それから(２)ですけれども、「意欲」に関しては、これも 2001 から 2004 で時系列的に見てみると、2004 がやはり非常に良くありません。厳しい評価を受けています。それからＱ10 の「参加の促進」、あるいは「活発さ」に関しても、やはり年を追うごとに厳しくなっているということですね。Q13 の「理解と知的満足」についてもやはりそうですね。古い年度ほど結果が良いです。

それで、わたしとしてはそれほど違った授業をやっている覚えはありません。毎年同じように授業をやっているつもりなのですが、なぜこのように差が出るのかというと、教員は替わらないわけですが学生は毎年毎年違った学生が入ってくるわけですから、そこにも

書いておいたのですが、人を見て法を説くではないですけれども、学生の個性を見極めながら違った対応をするしかほかはないという気がいたしました。

それから（３）ですけれども、「テキスト・配布資料」もやはり古いほうが良いです。それで、これだけは非常によく分からないのですが、「進度」に関しては昨年、新しいほど、2004 年度が 100％ですから、これだけは進度が適切だったと言っている。分からないと申し上げましたが、１点だけ解釈すれば、意図的に少しゆっくりめに進めた記憶があります。したがって、そのようなゆっくりのペースのほうが学生というのはやはりいいのかなという結果を反映しているような気もいたします。

それから、改善のポイントとして「ＶＴＲ」と「教室外での学習」という指摘が例年多いのですけれども、ＶＴＲは対応しているつもりなのですが、このような数値が出てしまった。それから学外の授業というのは授業の性格上、そのようなものができるわけはありませんので、この辺は学生側と教員側の温度差があるのかなという気がいたします。

それから、授業アンケートの結果についての全般的な意見なのですけれども、先ほど少し申し上げましたが、やはりムードメーカーというものがいると非常にクラスが締まるといいますか、運営がやりやすいです。2001 年度は比較的アンケートの結果が良かったわけですが、それはやはり非常にいいムードメーカーがいたからだと、わたしは思っています。それから、先ほど申し上げたように、同じ教員でありながらこのような格差が毎年毎年出てくるというのはやはり、その年の学生にふさわしい授業を、顔を見ながらやってやるしかないと強く思いました。

それからもう１点、わたしがここに勤務し始めたのは 2001 年度からなのですけれども、2001 年度に使っていたテキスト、『知の技法』と『論文の書き方』と『論文のレトリック』、この三つを使っていたのですが、今これは全く使っていません。その理由づけとしては、ちょっと高度すぎるということですね。今の学生にはちょっとこれはもう使えないのかなということで、１点だけ自己弁護をすれば、このような厳しい評価が出たというのは学生側にも学力低下の要因が一端はあるのかなという気がいたします。

時間になりましたので、以上です。ありがとうございました。

（町田）

どうもありがとうございました。とても早口でお話していただくことになり、申し訳ありません。既に予定の時間を超過しているのですが、４人のお話が終わりましたところで、教務部長に手短に総括をお願いいたします。

事例報告の総括（太田隆士教務部長）

まことに慌しくて申し訳ありません。４人の方の発表からかなり共通点がうかがえました。すなわち学力・意欲低下と、学習習慣が残念ながらついていないこと、毎年同じことをしていても２年後には通用しなくなってくる、というようなことが四つの学部で見て取

れました。その結果、演習担当教員はファカルティー・アドバイザーとしての機能も果たさなければいけない、生活指導もしなければいけない、学生カードの記入を指導したり、さらにはそのような状況の中にありながら４年後を踏まえてキャリア形成についても面倒を見なければいけないわけです。そのような大変な中で、萬歳さんがおっしゃったように、先生は頑張っているのだけれども、いまひとつ理解されてないということにもなっています。ですから、内藤さんが最後におっしゃったようにゆっくり進めるとか、さらには内容の絞り込みをするということがまだ必要なのかなと思われます。

学生の多くが求めているのは学生同士の意見交換であるということもわかってまいりました。これは実は開学以来、法・経・現代学部で開講しております２年次の教養演習でも従来から指摘されてきたことでして、どうも大学の教員はみんなおしゃべりであり、じっと我慢して学生同士に議論をさせることが苦手であるというのと同じ傾向が出ていることが浮き彫りになってきたかなという感想を持ちました。

慌しい総括ではありますが、こうしたことを踏まえて改善に取り組んでいただければ幸甚に思います。以上です。

（町田）

はい、ありがとうございました。これはわたしの認識不足かもしれませんけれども、隣の学部ではどのようになされているのかということを全然知らなかったのだなと、それでお話の中にとても重要なヒントが幾つかあったのではないかなと感じました。

本来は、それを元にこれから長時間かけて質疑を行っていただくというところだと思いますけれども、いかんせん、予定時間を大幅に過ぎております。このテーマは大変重要な問題だと思いますので、各学部に戻られ、後で皆様方に十分なご議論をいただければと思います。

それでは最後になりますが、萬歳先生がご報告を始められたときに、学長に駆けつけていただきました。ご四方全ての報告をお聞きいただきましたので、最後に学長から一言、お言葉を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

閉会にあたって（竹下守夫学長）

本来、冒頭にごあいさつとして一言申し上げるはずでございましたが、本日は理事会の議題が非常に多くて、大変長くなりまして、こちらの開始に間に合わなくなりましたので、遅ればせながら、ただ今からご挨拶申し上げます。

本日の４人の報告者の方のご報告をうかがっておりまして、１年次演習の持つ重要性を、いずれの学部もよく認識されて、いろいろな工夫をしておられることがよく分かりました。ごくおおざっぱに申しますと、報告の順序にも表れていましたように、法学部、現代学部はどちらかというと学部として統一的に１年次演習を運営していこうという方向、それに対しまして、経済学部、文化情報学部は担当する教員にかなりの自由裁量を認めるという

方向で進めておられるように思いました。これはどちらでなければいけない、全学統一しなければいけないということはございませんので、今日のほかの学部の運営のしかたをお聞きになられて、またそれぞれの学部で今後どうしていくかを検討していただければよろしいのではないかと思います。

ＦＤ研修会も今回で４回目になったわけでございますが、本学のＦＤ研修会はこれまで授業改善を中心的なテーマとして、着実にその成果を上げてきたと言えるのではないかと思っております。本学における授業改善の努力は山本教務部長、それから今回の太田教務部長と、二代にわたる教務部長の下で、全学教務委員会のイニシアティブと各学部の教授会の連携により､学生授業アンケートを全学統一的に実施するということをまず打ち出し、それからその集計結果を全面的に公表するということに踏み切り、さらに学生の授業アンケートの回答を踏まえて、それぞれの先生方が授業改善計画を作成して提出するという、そのようなステップを踏んで展開してきたわけであります。

これは、授業アンケートというチャネルを通じた学生とわれわれ教員との間の対話による授業改革と呼ぶことができると思います。そして、ＦＤ研修会がその対話の場を提供するという役割を果たしてきたということになると思います。今回は１年次演習を話題として、その対話をさらに進める努力をしていただいたということであると思います。先生方の熱心なご報告を拝聴しまして、本学の教育はこれからますますいい方へ進んでいくだろうという意を強くした次第でございます。

遅ればせのごあいさつでございますが、以上で私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

（町田）

学長、どうもありがとうございました。予定以上の時間を使ってしまいました。これはひとえに進行役の責任ではありますが、どうかご容赦いただけますよう、よろしくお願いいたします。それでは最後に、４人の先生方に、今一度の拍手をもって、本日の終会といたしたいと思います。

（研修会修了）